

復興へ

復興に向けて、県内の各地域で活動されている方々を紹介します

「支え合いをつないで、みんなの居場所に」

社会福祉法人南三陸社会福祉協議会



【写真の説明】1 えんがわカフェの様子。この日は小学生が宿題をしています。2 3子どもからお年寄りまで参加した「走らないミニ運動会」。(昨年の様子) 4 地域住民で手作りした看板。5 完成したヨーヨーキルトののれん。のれんの原型は地域の方が藍染めしてくれたもの。6 みんなな食堂の様子。7 一体感が伝わる社会福祉協議会の職員の方々の皆さん。災害公営住宅とつながっているウッドデッキで撮影。

平成30年4月にオープンした高齢者生活支援施設「結の里」。施設の名称には「手と手を結ぶ 笑顔を結ぶ 心を結ぶ」という意味が込められています。地域交流や高齢者・子育て世代への支援に取り組む南三陸社会福祉協議会の高橋さんにお話を伺いました。

―活動を始めた経緯は？

東日本大震災の被災者が暮らす災害公営住宅の多くはマンションタイプであり、高齢者や子育て世帯の孤立が懸念されました。そこで南三陸町では、福祉と住まいが連携した交流拠点の整備が公募されました。

社会福祉協議会は地域の福祉の中心的存在であることから、使命感を感じ応募したところ、整備・運営事業者として選ばれました。

―活動を始めるにあたり大変だったことは？

いざ施設をつくろうとしても前例がなく、資金も潤沢にあるわけではないので、そこで何を行うか検討に時間がかかりました。

この施設が地域の方にとって必要な施設にならなければ意味がありません。そこで、地域の方を議論の中心にしたワークショップを開催しました。

初回は150人の方が集まってくれました。行政やコンサルタント業者はお手伝いで、地域の方が主体です。さまざまな世代で議論を重ねていく中で、三つの方向性に固まりました。それは、カフェ、食堂、イベントの

隣接した災害公営住宅の集会所とはウッドデッキでつながっていて、そこで青空市やお祭りなどのイベントを定期的に開催しています。震災以降、お祭りなどのイベントがなかなかできなかったため、お父さん方が特に望まれていました。

―新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態措置への対応は

定期的に開催しているイベントもできず、なかなか外出できない状況なので、皆さんが寂しくなってしまうかと心配しました。

そこで、職員で話し合い、「ヨーヨーキルト」をみんなで分担して作成し、一つののれんをつくる「お茶の間ワークショップ」の企画を思いつきました。一人一人が自宅で10個のヨーヨーキルトを作成し、それを一つののれんにしようというものです。参加者を募集したところ、当初の予定より多い180人の方が参加してくれました。集まったヨーヨーキルトはつなげて「結の里」の文字にし、結の里の玄関に飾りました。

この企画は予想以上に好評でした。会えないけれど、心でつながることができたのだと思います。

―これからの課題は

ここは町の中心で、多くの方が集まりや



社会福祉法人 南三陸社会福祉協議会
地域福祉係長
結の里管理責任者
高橋 史佳さん
☎0226(29)6452 HP

三つです。私たちは、これまでの福祉サービスのほか、これらを運営していくこととなりました。

―活動の内容は？

「結の里」で「えんがわカフェ」を毎日運営しています。今までは私たちが外向いて話を聞くスタイルでしたが、そうではなく、誰でも来ることができる環境をつくり、皆さんを迎えるスタイルです。訪れた方には必ず声を掛けています。中には生活課題を抱える人も多く、相談に乗ったり、情報を提供したりしています。

カフェには1日平均15人くらいが訪れ、男女比は6対4くらい。飲み物は一杯100円で、この値段設定もワークショップで地域の方が決定しました。お金をもらうことが目的ではないのですが、そうすることでかえって来やすいという声がかえり、これは良かったと思っています。デイサービスを併設しているため、高齢者と子ども連れのお母さんとの交流も自然な形で生まれています。

すい所ではありますが、遠くにお住まいの方は参加が難しいです。そういった方々の声にいかにか耳を傾けるかが課題です。そのため、NPO法人と協力して青空市を町内各地で年に5、6回開催したり、住民主体のみんなな食堂を開催したりしています。

あるとき、みんな食堂の参加者の一人が「この食事を来ていない方にも届けたいね」とおっしゃったことがあり、とても感動しました。私たちがやろうとしていることはまさにそれで、見えない所にも思いをはせること。一緒に活動を重ねる中で、住民の方も同じ方向を向いているんだと感じました。

来てくれる方だけではなく、来られない方にもどのようにアプローチするか、私たちの今後の課題です。

―今後の展望は

震災により何もかもなくなり、1からのスタートだったからこそ、新しい思い切った取り組みができたのだと思います。住民の声を聴くことから始めたことで、皆さんの声を聴くことの大切さを改めて学びました。

職員同士の話し合いも活発で、みんなアイデアを出してくれる。工夫とアイデアは職員あつてのもので。みんなの意見を聴く環境を大切に、楽しみながら行っています。

今までの立ち位置を変えずに、チームが同じ方向で、地域の皆さんの声に耳を傾け、支え合いの拠点を一つついでいきたいと思います。そうしたことを積み重ねて、みんなの居場所を築いていくことができたらと思います。